



TITLE:

開会の辞

AUTHOR(S):

松本, 紘

CITATION:

松本, 紘. 開会の辞. 京都大学附置研究所・センターシンポジウム: 京都からの提言-21世紀の日本を考える (第9回) 「社会と科学者」 2015, 9: 1-4

ISSUE DATE:

2015-01-21

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/194288>

RIGHT:

開会の辞

京都大学総長 松本 紘

皆さん、おはようございます。本日は、京都大学附置研究所・センター主催のシンポジウムにお越しいただき誠にありがとうございます。

最初に、東日本大震災という未曾有の災害に遭われながら、復興に向けての大変苦しい長い道のりを力強く歩んでおられる地域の皆様方に対して、心よりの敬意を表したいと思っています。

まだまだ苦しい状況が続いている方々も多数おられるこの地において、京都大学のシンポジウムを開かせていただけますことは大変ありがたいことであり、まずもって御礼を申し上げます。

とりわけ、開催にあたりご尽力いただいた東北大学、宮城県教育委員会、それから仙台市教育委員会の方々には厚く御礼を申し上げます。

また、先ほど紹介がありましたように、このシンポジウムは、今回で9回目を迎えます。毎年1回、各地で「京都からの提言 ― 21 世紀の日本を考える」というテーマの下で開催してまいりましたが、この9年間、変わることなくご後援をいただきました読売新聞社に対してもこの場をお借りして、御礼を申し上げたいと思います。

皆さんのお手元に本日のパンフレットが配られていると思いますが、「京都からの提言」というタイトルの下、京都大学の附置研究所・センターが紹介されています。

本日は、高校生の皆さんもたくさんお見えですが、高校生の皆さんから見ますと、大学というと、文学部とか、法学部とか、工学部とか、理学部とか、経済学部などといった「学部」しか見えていないのではないかと思います。本学の発行している「大学案内」という冊子にも、学部の紹介は詳しいですが、大学院の紹介はほんの少しです。しかし、大学というのは、学部の上に大学院があって、大学院以外にも附置研究所や研究センターというものがあります。

京都大学では、附置研究所が14あります。研究所の規模はまちまちですが、他にセンターなどの教育研究施設等が18あります。本日は、そのうちの22の研究所・センターが主催するシンポジウムです。

研究所・センター群は本学の研究力の主要な源泉のひとつとなっています。京都大学には教員が約3000名近く在籍していますが、そのうちの約700名が、この附置研究所・センターで研究・教育にあたっています。その研究所・センターの教員が、本日ここでお話をさせていただくことになっています。

我が国では、著名な賞というとノーベル賞がすぐ挙げられますが、ノーベル賞だけでは

なく、たとえば数学の分野でいいますと、フィールズ賞というものがあり、これは数学を対象としないノーベル賞に対比される、最も著名な賞です。そのほか各学問分野には世界的な賞が多数ありますが、そのような賞を受賞しているユニークな優秀な研究者が研究所・センターには多数在籍しています。

例えば、ノーベル賞とフィールズ賞を合わせて 10 名の受賞者が京大関係者におりますが、そのうち 6 名が、この研究所・センターに所属する、もしくは所属したことのある研究者です。

そういった意味で本学の研究の最先端の大きな部分を研究所・センターの研究者が担っていると、そういうふうに思っています。

ノーベル賞受賞者以外にも、昔から京都大学には非常にユニークな研究者が多数おりました。例えば、京都学派というものを、皆さんもお耳にされたことがあると思います。西田幾多郎という日本の誇る哲学者が京都大学におりました。西洋のどの国に行っても哲学の世界では西田哲学は有名です。そして、京都学派という名前で敬意を払われています。その後任の田辺元も有名ですし、同じ京都学派でも、哲学だけではなくて、経済学の分野でも近代経済学の京都学派が存在したといわれています。さらに人文科学研究所にはかつて桑原武夫という総合文化人と呼んでもいい著名な研究者が在籍していましたが、彼やその共同研究者も京都学派あるいは新・京都学派とよばれます。

さらには、今西錦司という霊長類研究の道を拓いた研究者がかつて京都大学には在籍し、こういった研究者の方々は、現場で研究を進めるといいうゆるフィールドワークを大切にしてきました。

現場を大事にし、未開のフロンティアに挑戦するという精神は、ヒマラヤやアフリカの奥地や、東南アジアの秘境において学術研究を行うという独自の研究スタイルを生み出しました。マスコミで広く紹介されたこの学術探検を通じ、世間の耳目を集め、現在でも、京都大学というと探検大学と呼ばれることがあります。この独特の研究スタイルは今なお多くの研究所・センターに引き継がれています。

学生諸君と一緒に現場で研究をする。そこから、また新しいものを見つけ出す。「Gross National Happiness (GNH)」にあらわされる幸福を基準に国民の生活の良さをはかろうということを提唱した国としても知られるブータンという国がありますが、最近では、その国を丸ごと研究しようということで、研究所・センターの研究者を中心に、探検大学としての面目躍如、フィールドワークに出かけています。その他にも、文系、理工系、医学系、といったさまざまな研究所・センターの活動の一端が、このパンフレットに記載されておりますので、ぜひお目通しいただきたいと思います。

さて、先ほど司会の方からご紹介をいただきましたように、これまで全国を巡り、「京都からの提言」という形で「日本の将来を考え」てまいりました。各地では地域の方々より叱咤激励を受けながら、京都大学もこれまでにまして積極的に発信に努めてまいりました。

今年度はこの仙台の地で開催をさせていただくことになりました。東北固有の困難な問

題を抱えて、日々復興・再生に向けて頑張っておられると思いますが、それは一つこの地域にとどまるものではなく、日本の国全体が直面している大きな問題とも連動しているように思えます。世界全体には、水や食料の問題、あるいはエネルギーや資源の問題は言うに及ばず、地球温暖化問題など解決の難しい大きな課題が多数存在しています。

そういった事柄から始まって、今回の震災、そして原子力発電所の事故等乗り越えなければならない大きな課題に我々日本人は直面しています。それを乗り越えていくためには、地域社会の人々のみならず、大学や科学者も、こういった社会問題にこれまで以上に真摯に目を向ける必要があります。そこで、本日は「社会と科学者」をテーマに取りあげました。

日本国は、1千兆円を超える借金を抱え、人口も減少し、経済も20年間停滞をしてきました。これまで非常に暗い話題が多かったのですが、最近、少し明るい兆しが見えてきています。今回の震災でも示されました日本人の勤勉さ、そして粘り強さ、そういうものが世界に広く知られました。この日本国民の素晴らしさをベースに、これから世界の中で、日本国を再生していく、日本人を再生していくということが一番重要な課題だろうと考えております。

本日は、先ほどご紹介がありましたように、多くの先生方にお話をさせていただきます。また、東北大学の平川先生にもご講演を快く引き受けていただきました。厚く御礼を申し上げます。

京都は大学の街とよくいわれます。京都は小さな町ですが、コンパクトであるという利点を生かして、京都府知事、京都市長や大学、メディア、観光、産業界の代表者が3か月に1度程度集まり、「京都の未来を考える」懇談会を実施してきました。私もそのメンバーの一人です。その中で2013年5月に、京都の未来の設計図「京都ビジョン2040」を提言いたしました。その中の大きな柱の一つが、「大学のまち京都」です。京都市民の11人に1人は学生です。彼らの存在が京都の元気の源になっているのではないかと思います。

また、学生も、町の中で愛情をもって市民から迎えられております。今では学生も豊かになり、食えることができずに困っているという人はほとんどいなくなりましたけれども、「ご飯が食べられなければ、どうぞ食べてください、その代わり皿洗いをしてもらったら結構です」というような、市民挙げての学生への支援もまだ京都には残っています。

今はどうか知りませんが、大学の先生も昔は、よく祇園のほうに出かけ、そこではツケがきいたと聞きます。これも寛大な市民から大学人に対する一種の応援かと思います。「大学のまち京都」ならではです。

第三高等学校から京都大学は生まれたのですが、その前身校は実は大阪にありました。一方、平安時代から京都には大学寮というものがありませんでした。その伝統ということもありましたし、新しいことは京都からと、京都市民の意気込みもあったのでしょう、当時の府の予算の大きな部分を出して、帝国大学を京都へ誘致したというのが京都大学創設の経緯です。

また、近年産学連携ということで、いわゆる大学発のベンチャービジネスがはやりですが、実は最初にそのような試みが活発になされたのは京都です。京都では多くの研究者がベンチャーを興そうと共同研究が活発で、それが今の京セラ、村田製作所、ローム、堀場製作所など、数え上げれば10個や20個はすぐに出てまいります、そういった会社に大きく成長して、今、世界の最先端でしのぎを削っています。

うれしいことに、京都の企業は東京へ本社を移さないところが多いことが特徴です。大阪の大企業のほとんどは、東京へ本社を移してしまって、ちょっと関西全体が地盤沈下気味なのですが、京都の企業は京都に本社を置くことに誇りを持っています。

東北には、東北大学を筆頭に非常に素晴らしい大学が多数あります。旧制の高等学校でいいますと、京都大学は第三高等学校をベースにできた大学ですが、東北大学の前身は第二高等学校で、東大の次に設立された高等学校でした。東北にはそういった素晴らしい伝統を持つ立派な大学もありますし、ご来場の高校生の皆さんの多くが、この東北の地域で勉強されると思います。京都にもまた素晴らしい文化があり、日々静かな散策ができて、ユニークなところですから、もし興味がありましたら、皆さんも京都までぜひ足を延ばしていただければと願っています。

きょうの午後は、iPS細胞研究所長の山中先生がご講演をされます。一昨年、ノーベル賞を受賞されて、きょうは、その素晴らしい話もお伝えできるのではないかと思います。先ほども申しましたように、京都大学にはちょっと変わった先生が多いのですが、山中先生は非常に常識的な先生だと思います。先生の素敵なお人柄が、若い皆さん、特に高校生の皆さんに大きな夢を与えてくれるのではないかと期待をしているところです。

本学の「自由の学風」は勝手気ままという意味ではありません。本当に何にもとらわれずに新しい発想ができる、さらに自分を見つめ直し、自分の中にあるものに縛られず、真の意味で自由になるということこそ京都大学の「自由」です。そういった本学の「自由」をベースに多くの研究所・センターの研究者が、きょうは素晴らしい話をされると思いますので、ぜひお楽しみいただければと思います。本日はどうもご来場ありがとうございました。